

報告

浸食と決壊

— 中世イタリア絵画における流動体としての大理石イメージ —

松原知生 (西南学院大学)

西洋文化においてよく知られたチャンス・イメージとして、大理石や半貴石の断面に浮かび上がった像(とりわけ人物像や風景)が挙げられる。実際、自然が石の中に偶然生み出した具象的なイメージについては、プリニウスからアルベルティに至るまで、複数の鍵テキストに言及がある。他方、大理石板に現れた非具象的な斑模様については、言語化が困難なこともあり、建築を装飾する単なる付随要素として扱われることが多かった。フラ・アンジェリコ作品に描かれたこのパレルゴンのモチーフを神秘神学の観点から解釈し、新たな展望をもたらしたのは、ディディ＝ユベルマン(1990年)であった。さらに最近では、バリ(2020年)やヴォルフとガンボーニら(2021年)が、「物質的転回」の流れを受けて、メディアムとしての大理石の美学/詩学に着目している。

こうした成果を踏まえ、本報告では西洋絵画史に画期をもたらした2点のテンペラ板絵、すなわちジョットの《オンニッサンティの聖母》(1310年頃)と、シモーネ・マルティーニの《受胎告知》(1333年、ともにフィレンツェ、ウフィツィ美術館)をとり上げ、画中で特異な存在感を放つ大理石イメージの意味と効果について考察する。大理石の斑模様は、それ自体では確定的な意味をもたない両義的な形象であり、両作品においては、以下の3要素との関係性の中で、その意味作用と効力が重層的に決定されている。

①聖母マリアとその身体。色大理石を構成する3つの色(赤・青・白)は、聖母マリアの衣服を描き出しているのと同じ顔料により構成されている。のみならず、その形態的照応や接触を通じて、聖母の身体が換喩的に「流動化」したものと捉えることができる。

②作品内外の諸モチーフ。ジョットにおける白大理石の床とその内部に埋まった貝の化石、シモーネにおける金地とその上に浮彫状に記入された銘文は、色大理石の不定形と弁証法的な対比関係にある。シモーネの場合はさらに、のちに同じ聖堂に設置されるロレンツェッティ兄弟の祭壇画下方に描かれた、遠近法的な象嵌舗床とも対位法を形成することになる。

③画面の闊および観者の存在。色大理石の斑模様として流動化した聖母の身体は、観者の方へと逆遠近法的に突出し(ジョット)、さらには画面の内と外、天上と地上を隔てる境界線を超えて流出しようとしている(シモーネ)。

以上の分析を踏まえ、両作品の画面下方に配された大理石イメージを、聖俗の闊を決壊させ、現実空間を浸食するダイナミックな流動体として捉え直す。さらに補遺として、ペルッツィが色大理石をふんだんに用いて1530年代に制作したシエナ大聖堂主祭壇について、シモーネ作品もその一部をなしていた空間的コンテキストやジョット作品との構造的類似性を踏まえ、新たな解釈を試みる。